

当たり前なことは何もない

「週末縄文人」というYouTubeチャンネルがあります。現代にあって、週末だけ縄文時代の不便さにあえて身を投じているサラリーマンのお二人の番組です。その方が、「自然資本論」と言うポッドキャスト出演時に、「500人の集落を養うのにどれだけのブナ林が必要か」とお話をしていたのが気になりました。番組では数字は示されなかったのでCopilotに聞いてみますと、立命館大学の中村先生が「縄文時代の人口を推定する新たな方法」としてまとめておられる論文にたどり着きました。読んでみますと、縄文時代の人口密度は、時に1人/km²を超える時期がありつつも、おおむね1人未満であったようです。

さて、仮に大震災により一切切切失ったあなたが、幸運にも十分な広さのブナ林を見つけたとしましょう。乱暴な置きですが、仮にご家族4人として、400ha（1km²/人×4人＝4km²）のブナ林があったということです。そこで生きていけるでしょうか？（ちなみに、「ブナ」はどんぐりをもたらしてくれます。）

「この世界が消えたあとの科学文明のつくりかた」を著したルイス・ダートネルなら、ブナ林に行く前に、図書館が燃えずに残っていないか見てきては？、と言うかもしれません。電気もガスも水道も使えない状態で生きていくには先人の知恵が必要です。それこそ、どうやれば火を起こせるのか、衣服を作るのに繊維をどう取り出して紡ぐのか。もうネットでは検索できませんので、図書館にある本で何とかする以外にありません。私と同世代の方なら、子供のころに観た「不思議の島のフローネ」や「北斗の拳」を想起されるでしょうか。少し前の「天穂のサクナヒメ」も世界観が少し近いかも？

農業については、やり方はわかっているから大丈夫、とっておられる農家の方もいらっしゃるでしょう。ただ、震災以前のようにはいきません。まず、タネはもう買えません。ご自身で残しておいたものだけが頼りです。水はどうでしょうか。文明は灌漑と共に興ったわけですが、用水に動力が要る仕掛けになっていたら、あてになるのは雨水とため池です。日照りでキャベツが不作だった昨年を思い出すと、不安になりますよね。

そして、肥料、農薬など、石油を動力や原料として工業的に製造されるものは、仮に作り方が載っている本を図書館で見つけられたとしても、内容が難しいうえに、製造装置は動かせません。農機も同様です。

ここまでの事態に陥らなくても、昨日まで難なく入手出来たものが突然そうでなくなることを、最近われわれは学びました。コロナ禍ではマスクが手に入らなくなりました。農業でも、中国が輸出検査を強化したことで肥料原料のリンが供給減となったことに不安を覚えた人も多いでしょう。本号の「日本における窒素肥料原料の需給構造の長期的推移」でも考察されていますが、現在の日本では窒素源肥料の硫安は副産物として生成されており、主産物の状況次第では調達が難しくなるリスクを認識しておくべきだということになります。

何をどんな手順で生産するかは、技術の発展により選択肢が広がるものの、実際にどういう価格でどれくらい供給することになるかは、局所では決まらず、マクロ的に決まることとなります。肥料について言えば、ハーバー・ボッシュ法以前なら農業界・農村部で完結できたかもしれませんが、今や他産業・グローバルに連関しています。

「みどりの食料システム」にあるように、食料を供給していくサプライチェーン・バリューチェーンの総体を表現するのに農林水産省は「システム」という語を選びました。農業は生産段階のみで完結しているわけではないのだよ、とのメッセージとされますが、含意はそれよりも深いかもしれません。「食料システム」の外側にもシステムがあり、食料システム自体が構成要素となってより大きなシステムを構成しており、それは価格という情報を介して全体が均衡していく市場経済のことだ、と私は解釈しています。このシステムがあることによって、メーカーは製造すれば儲かる商品と判断し、前述の硫安も生産されていると言えるのですから、システムは重要です。

ただ、これは冒頭の縄文人や図書館の万能感を奪う話ではありません。システムは急なショックからの回復に思いのほか時間がかかることを我々は幾度も体験して知っています。システムに依存することでとてつもない恩恵を享受するだけでなく、脆弱性をも引き受けています。当たり前なことは何もないのです。

弊社は、生産現場との強いつながりを生かし、常に現場に立ち返り、借り物でない言葉でお伝えしてまいりました。不確かなものが多いこの時間帯でも、皆さまの対話相手としてお声がけいただけるよう努めてまいります。

（株）農林中金総合研究所 常務取締役 小畑秀樹・おばた ひでき